



ローカライゼーション(Localization)とグローバル リゼーション(Globalization)の狭間で異文化コ ミュニケーションを考える

著者	巖 廷美
雑誌名	エコノフォーラム
号	26
ページ	74-74
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028472

2019年
11月25日
月曜日

世界はこれまでもこれから益々グローバル化が進み、様々な局面においてボーダーがなくなりつつあります。このような、ボーダーなき時代に生きる我々は違う文化を享受するたくさんの異文化圏の人々と接することになり、コミュニケーションをする必要が高まっています。そこで、今日は日本語話者である私たちのコミュニケーションのスタイルについて考えてみたいと思います。

第二次世界対戦中から日本人特有のコミュニケーションの特色については研究され、「恥」と「罪」「タテ」と「ヨコ」「甘え」と「自立」など、いくつかの対立する鍵概念を用いて、日本人の対人関係におけるコミュニケーションのあり方が論じられてきました。しかし、これらの概念が日本人のコミュニケーションスタイルの全貌を明らかにするものとは決して言えませんが、首を領ける部分も多いはずです。

巖 廷美 准教授（社会言語学）

ローカライゼーション(Localization)とグローバルゼーション(Globalization)の狭間で異文化コミュニケーションを考える

では、現代における日本人のコミュニケーションスタイルのいくつかの特徴について考えてみましょう。まず、「遠慮」と「察し」である。「遠慮」とは発信者が記号化しないメッセージで、「察し」とは記号化されなかったメッセージを理解することであり、日本のように、言葉を通して意味を明白に伝えるより、以心伝心、阿吽の呼吸のように、コンテキストへの依存度が高いコミュニケーションを好む高コンテキスト文化であると言えます。

また、「場面に拘束される定型表現や決まり文句が多い」特徴があります。「いつもお世話になります」、「毎度ありがとうございます」、「よろしく願います」、「つまらないものですけど」、「すみません」など、現実の意味とあまり関係のない表現がある特定の場面で習慣的に使われることが多いことは周知のとおりです。つまり、「言葉のマニユ

アル化」が進んでいると言えます。こういう文化圏では、話者が各自の言葉 creatively 表現することがより、マニュアル通りに表現することがより多く求められると言えます。（断定的な表現を好まない）ことも一つの特徴として考えられます。イエス、ノーをはっきり言わないで、あいまいな言い方をする場合も多くあります。1996年、ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎さんは「あいまいな日本の私」というタイトルで授賞式での記念スピーチを行いました。もちろん、このスピーチは具体的にコミュニケーションスタイルの曖昧さを指摘したわけではありませんが、大江さんは日本文化のキーワードの一つとして「曖昧さ」を認識していたと思われます。曖昧な態度から曖昧なコミュニケーションスタイルまで「曖昧さ」というのは日本らしいコミュニケーションスタイルの一つであると考えられます。

これまで述べてきたコミュニケーションスタイルは4次産業革命の台頭が叫ばれる情報化社会の中で果たしてどのくらい有効なコミュニケーションの方法でしょうか。これらのコミュニケーションの方法では異文化圏の相手に理解してもらうことはなかなか難しいような気がしてなりません。だからと言って、日本人のアイデンティティーとも言えるコミュニケーションのスタイルをいわずゆるグローバルスタンダードにあわせて修正していくべきでしょうか。ここで立ち止まってグローバル社会の中のローカライズされたコミュニケーションスタイルをどのように考えていくべきか、考えてみることは情報化時代を生きていくうえでますます大事なことであるように思います。